

# 馬肉スキャンダル

この文章を執筆している二月の時点で、日本における大ニュースの一つは大手ホテルや百貨店における料理の表示偽装の問題だが、一年ほど前にヨーロッパでも似たような「馬肉スキャンダル」事件がニュースをさわがせていた。この事件は、食の安全の根幹に関わるというだけではなく、動物福祉や動物観に興味を持つ者にとっても興味深い点があった。

二〇一三年の一月にアイルランドの当局が、アイルランドとイギリスで牛ひき肉として売られていた冷凍ハンバーガーの中に、馬肉や豚肉が混入しているのをDNA検査で発見したと発表した（中には二九パーセントが馬肉だったバーガーもあった）。追加の調査の中で欧州諸国で馬肉の混入した製品が発見され、中には一〇〇パーセント馬肉の「牛肉」ラザニアなどもあった。混入の経路をたどるとフランスなど複数のEU諸国の食肉企業がからみ、それらの企業の食肉の輸入元も多様で、さうとう複雑な事件らしい。馬肉の出所としては、ルーマニアで馬に荷車を引かせてはならないという動物福祉の法律ができた結果、用済みになった馬が捨てられ、それが大量に食肉処分されて欧州諸国に出回ったという説がある。その他ポーランドから来た馬肉もあったとか、いくつか

## 伊勢田 哲治

プロフィール  
1968年福岡県生まれ。京都大学大学院文学研究科准教授。京都大学文学部卒業。文学研究科修士課程終了後渡米し、イギリスで学位取得。専門は科学と哲学・倫理学。主な著書に『疑似科学と科学の哲学』『認識論を社会化する』『動物からの倫理学入門』（以上名古屋大学出版会）、『哲学思考トレーニング』（ちくま新書）、『倫理的に考える』（勤草書房）などがある。

のルートが報道されているが、未だに全貌は明らかになっていないようである。

このスキャンダルが単なる食の安全の問題にとどまらない大騒ぎになったのは、英米では馬肉食はタブーだからである。イギリス人ももちろん牛肉は食べるが、牛と違って馬はなじみの深い伴侶動物であり、犬とならんで賢い動物としての評判も確立しており、食べるなどもつての他だと多くの人が思っている。イギリスでは用途にかかわらずすべての馬がペット用のマイクロチップだけでなく個体確認のための「パスポート」を常に携帯することまで法律で決められていて、手のかけようは他の動物の比ではない。だからこそ、知らず知らず馬肉を食べてしまっていたということがイギリス人にとっては大変ショックなできごとだったのである。イギリスは世界の動物愛護・動物福祉運動を牽引してきた動物愛護先進国だが、そのイギリスなどの法制にルーマニアが無理にあわせようとした結果がまわりまわって馬肉スキャンダルになったのだとすれば、何とも皮肉な話である。皮肉というだけでなく、動物の扱いのような文化や慣習の深く関わる問題を法律主導で変えようとすることの危険性についての教訓も読み取ることができるとは思えない。

## 月刊 みんなぱく

1月号目次

- |   |   |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文<br/><b>馬肉スキャンダル</b><br/>伊勢田 哲治</p> <p>2 <b>特集</b><br/><b>馬</b></p> <p>2 人類社会の鏡としての馬 池谷 和信</p> <p>4 十二年後はヒノエウマ 板橋 春夫</p> <p>6 モンゴル競馬の醍醐味 小長谷 有紀</p> <p>8 天馬空を行く——馬のファンタジー<br/>山中 由里子</p> <p>9 午年には、やる気に拍車をかけて——乗馬のススム<br/>平石 典子</p> <p>10 似たモノさがし<br/><b>信じてはいないけど……</b><br/>——身近なお守りたち 宇田川 妙子</p> <p>12 みんなぱく Information</p> | <p>14 地球ミュージアム紀行<br/><b>仮面と人形の待つ家——インドネシア・バリ島</b><br/>吉田 ゆか子</p> <p>16 多文化をあきなう<br/><b>心のなかの国境線をひき直す</b><br/>萱野 智篤</p> <p>18 フィールドで考える・退官寄稿<br/><b>手仕事によるモノづくりの現場にて</b><br/>吉本 忍</p> <p>20 人間学のキーワード<br/><b>物質性</b><br/>古谷 嘉章</p> <p>21 異聞逸聞<br/><b>「金網」に囲まれた島・沖縄の「音」</b><br/>呉屋 淳子</p> <p>22 制服の世界、世界の制服<br/><b>巫女への変心</b><br/>長坂 康代</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|